慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第十九世紀英国反正統派経済学
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.4 (1937. 4) ,p.501(1)- 545(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19370401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田評論

昭和十二年四月 ◇ 第四七六號 ◇ 定價參拾錢（送料參錢）

物價騰貴論……永田清
武相史研究上の諸問題（二）……石野瑛
アメリカ普通教育一斑……清岡暎一
評論の評論……原實

〔書評〕永田教授著「現代財政學の理論」を讀む……高木壽一
教科書にない英語……宮田勝善
大學豫科二年及び高等部身體檢査報告……片山弘

海外通信
海外に於ける三田會の活躍……小高泰雄
ベルリンより……高村象平
□ゴルフ片言……矢野善衛
大學醫學部の結核救濟事業……編輯部
貴衆兩院議院竝有志懇話會……編輯部
小幡英之助氏の傳記編纂……編輯部

□塾報　□雜報　□各地三田會　□其他諸報告

發行所　東京市芝區三田慶應義塾内　三田評論發行所

三田學會雜誌　第三十一卷　第四號

第十九世紀英國反正統派經濟學

高橋誠一郎

一

アダム・スミスは其の先人より傳承せる散漫なる資料を蒐集し、之れに脈絡と系統とを與へ、其の根柢に横はりつゝある原理を啓示して、古典經濟學の基礎を開いた。而して、彼れの下せる結論中の或る者は『國富論』出版直後に於いて、種々なる方面から幾分の異論を挾まれなければならなかつたが、而も彼れの見解は大體に於いて彼れの生活せる時代の精神と一致し、其の體系は殆んど何等有力なる反對論に遭遇することなくして、時人の承認する所となつた。（昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷一一四頁參照）。

吾人が他の機會に於いて言へるが如く、第十八世紀の思想家は、彼れ等が世界主義者である以上に、國民主義者

であつた。アダム・スミスは彼れの大著を『世界の富』とも『個人の富』とも呼ばずして、『國民の富』と題した。彼れ並びに彼れに次げる英國經濟學者等は彼れ等の國民性を以つて當然のことゝ看做し、而して彼れ等の原理が國民的立法及び國民的行政によつて實行せられたならば、大英國は特に利益す可きことを主張したのである。（『三田學會雜誌』第三十卷第一號所載拙稿『國民主義經濟學』五頁參照）。經濟的國民性の近世的總念は特に英國に於いて其の發達を見た。フリードリッヒ・リストの指摘せるが如く、眞の國民的精神は、一國が產業及び交易に於ける共通の利害に由つて統一の一定度位に到達せる際にのみ其の國に生起することが出來た。今や產業及び交易に於ける「地方的ペートリオチズム」（local patriotism）は國民的ペートリオチズムに擴大した。種々なる原因は這般の擴張に貢獻したが、其の大多數は、住民の增加、旅行により、郵便により、又新聞紙による全英國に亙れる交通の增加と關聯せるものである。（Alfred Marshall, Money Credit & Commerce, 1924, pp. 1-3.）。アダム・スミスが『國富論』を草した時代に於いては、安定せる政治的狀態、可なりに良好なる道路及び印刷機は英國民中の敎育ある階級を結合するに資する所が大であつたが、而も地方的特殊利害は尙ほ往々國民的利害よりも有力であつた。地方的特殊的利益は結局國民的利益に反する行爲によつて促進せらるゝことが稀有である。利己的政策は概して愚劣なる政策である。（ibid., pp. 3, 4.）。是に於いて乎、彼れは經濟關係を地方的拘束より脫離せしめ、生產力を增加し、而して產業及び商業に新たなる發動力を與ふるが爲めに個人主義と自由主義とを歡び迎へた。彼れの社會哲學は個人及び國民の經濟的利益が實質上同一なりと做すの推定に基礎を有するものである。

然るに、國民を以つて、人間社會の基礎的單位なりと觀じ、而して必要なる改革に從事し、人類の進步を促進するが爲めの最も自然的なる動因なりと做すの信念が次第に鞏固と爲ると共に、スミスの體系は先づ前述の如き根本觀念に於いて其の最初の攻擊の一に遭遇しなければならなかつた。『國富論』が富の本質に關して誤れる見解を有し、公私の富を混同せることを論據として之れを非難せるものに、第八世の伯爵ローダデール（Eighth Earl of Lauderdale）ジェームズ・メートランド（James Maitland）がある。而して彼れに於いてスミス經濟學の基礎を成せる根本概念は其の母國英國に於いて初めて系統的に審議せらるゝに至れるの觀がある。

二

ローダデール卿の主著『公富論』（An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, and into the Means and Causes of its Increase.）は一千八百〇四年エヂンバアラオに於いて出版せられ、同八年、巴里に於いて E. Lagentie de Lavaïsse の佛譯現れ、翌九年 Ueber Nationalwohlstand. の題下に其の獨譯上梓せられ、而して同十九年著しく擴大せられたる原著第二版が同じくエヂンバアラオに於いて出版せられ、同年、巴里に於いて E. Economista. の第一輯第五卷中に伊譯せられてゐる）。彼れは尙ほ本書出版以前、一千七百九十四年に Letters to the Peers of Scotland. を、同九十六年に Thoughts on Finance, suggested by the measures of the present session. を（其の再版より三版までを翌九十七年に出版）、同九十八年に A Letter on the Present Measures of Finance; in which the Bill now depending in Parliament is particularly considered. を出し、更らに本書出版の

後に於いて、『エヂンバアロオ評論』一千八百〇四年第四卷第八號に掲げられたるブルーハム卿（Henry Peter Brougham）の批評に對して同年 Observations by the Earl of Lauderdale on the Review of his Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth published in the eighth number of the "Edinburgh Review." を（更らに之れに對する應答が Thoughts suggested by Lord Landerdale's Observations upon the "Edinburgh Review." より題して其の翌年に現れてゐる）、翌五年に Thoughts on the alarming state of the Circulation and of the Means of redressing the Pecuniary Grievances of Ireland. を、同年 Hints to the Manufacturers of Great Britain on the Consequences of the Irish Union; and the System since pursued of Borrowing in England for the Service of Ireland. を、九年 An Inquiry into the Practical Merits of the System for the Government of India under the Superintendence of the Board of Controul. を、十二年 The Depreciation of the Paper-currency of Great Britain proved. を、十三年 Further Considerations on the State of the Currency in which the means of Restoring our Circulation to a salutary state are fully explained, etc. を、十四年 A Letter on the Corn Laws. を、同二十二年 Sketch of a Petition to the Commons House of Parliament, submitted to the consideration of all who feel for the welfare of the country, or for the distresses of the lower orders of the people. を、二十九年 Three Letters to the Duke of Wellington, on the Fourth Report of the Select Committee of the House of Commons, appointed in 1828 to enquire into the Public Income and Expenditure. In which the nature and tendency of a Sinking Fund is investigated, and the fallacy of the reasoning by which it has been recommended is explained. を公にしてゐる。尙ほ上院議事錄は彼れの署名を有する八十六の抗議書を載せてゐる。別に彼れの著と目せらるゝ匿名の書に Plan for Altering the Manner of Collecting a large part of the Public Revenue; with a short Statement of the Advantages to be derived from it. が存する。

『公富論』は英國皇太子に捧げられてゐる。著者は本書初版の廣告に於いて、此の卷と共に通商及び財政に關する立法に關し、又通商條約の效果に關する第二卷を上梓せんとするの意向を有して居つたのであるが、而も是れ等の問題に關する彼れの意見は單に茲に叙述せらるゝ一般諸原理からの推論を形成するものであり、而して彼れは是れ等一般原理の多くが嘗だに斬新なるのみならず、一般に承認せられたる意見に悖ることすらあるを知るが故に、彼れは暫く休止して、彼れが此の出版物中に於いて表明せる意見が那邊まで世評の試練に堪ふ可きかを看出すまで、其の計畫の殘餘部分の遂行を遷延するを以つて一層賢明なりと思惟せる旨を述べてゐる。

三

著者はジョン・ロックの『人間悟性に關する論文』を引用して、言葉の誤れる使用法によつて此の世界に流布せる錯誤と曖昧、誤謬と混亂とを考察する者は、是れ迄に使用せられ來つたが如き言語が果して知識の進歩に貢献する所大なりしや、或ひは又其の阻止に貢献する所大かりしやを疑ふ可き一定の理由を看出す可きであると做してゐる。（Locke, Essay concerning Human Understanding, Bk. III. ch. xi. § 4.）。不注意且つ不適當なる言語の使用は

普通の生活上の出來事に於いてすら屢々多くの誤解を生ずることが慥かであるが、言語は又、總べての科學に於いて偏見の最も有力なる支持者であり、錯誤の最も敏活なる助長者たることが往々にして看出された。而も著者を以つて觀れば、經濟學の如く、這般の錯誤の原因に累せらるゝの虞れ大なるものは存することがない。科學の多くのものゝ主題は學者の意想中に發するものであつて、卓越せる教育と向上せる心意を有する人々によるの外、斷じて論述せらるゝことのないものである、而して、是れ等の人々の言語は固より彼れ等の觀念の精確さを享有しなければならぬ。然るに、一國家の富を增加し、而して之れを最も有用なる目的に適用するの手段を教示することを公言する經濟學（Public Oeconomy）は必然總べての社會階段に於いて最も下賤無學なる者の間に於いてすら討議の題目たるものであつて、其の粗野にして不正なる概念は當然誤謬の上に基礎を有し、錯誤に富める表現を導かなければならぬ。（Public Wealth, ed. 1804, pp. 1-4.）。而してローダデールを以つて觀れば、アダム・スミス其の人も亦、斯くの如き粗野にして謬妄なる概念に累せらるゝものである。

一世紀以上に亙れる重商主義の流行と其の結果たる歐洲に於ける立法の體系に於けると等しく英國に於いて經濟上の問題を論述せる著者の推理に於ける幾多の誤謬は、總べて富と貨幣とを同義と考ふるの習慣より發生するものであつて、經濟上の推理に誤れる觀念を生ぜしむる言語の影響の有力なる實例を形成するものではあるが、而もそは恐らく言語の媒介によつて經濟學に導かれたる最致命的なる誤謬ではないであらう。吾人が一國民の富（wealth）に就き、若しくは個人の富（riches）に就いて云々するに際して使用する名辭は總べての國語に於いて精確に同一である。是れ等のものは私的富が一般に國民的富の一部分としての外、如何なる見解に於いても思議せられざることを表示する。其の社會のあらゆる成員の資産增加は、同一の社會に屬しつゝある如何なる個人にも損害を蒙らしむることがないとしたならば、一樣に國民的富の增加と考へられる、又、あらゆる人の財産の減少は、其の同國民中の或る者の富の增加を來すことがなかつたならば、必然之れに伴へる國民的富の減少を生ぜしむるものと考察せられた。卓越せる一哲學者（アダム・スミスを指す）は曰く「一社會の資本は、之れを構成する總べての個人の其れと同一物であつて、惟り之れと同一態樣に於いてのみ增加せらるゝことが出來る」と。（Wealth of Nations, 1776, vol. I, pp. 409-410.）。而もローダデールに從へば、公の富が單に個人の富の總計を表示するに過ぎざるものと看做さる可きに非ざることは疑問の餘地なき所である。（Public Wealth, op. cit., pp. 6-8.）。

斯くて、彼れは公富と私富との間の區別及び對立の基礎を看出すが爲めに、先づ第一に價値の本質を考察する。價値の所有のみ惟りあらゆる貨物をして個人の富の一部を形成するの資格を與ふるものである。即ち彼れは其の著第一章の初めに於いて曰く「進んで公の富と私の富とを構成する所のものを考察し、若しくは其の孰れかの增加を來さしむるの事情を探究するに先立つて、明確に價値の本質を理解し、而して是れに由つて、惟り總べての貨物に對して、そが個人的富の一部を形成するが爲めに取得せざるを得ざる性質を與へ得る所のものが何であるかに關して明瞭なる觀念を所有することが必要である」と。（ibid., p. 11.）。

彼れに從へば、價値があらゆる貨物に授與せられ得るが爲めには二個の條件を必要とするの觀がある、第一に貨

物は人間に取り有用若しくは快適なるが故に其の願望の對象でなければならず、又、第二に貨物は稀少の一定度位に於いて存在しなければならぬ。價値なる名辭は、其の本原的の意義が如何なるものであつたにせよ、そが日常の用語中に使用せらるゝ所では、或る一定貨物中に固有なる性質を表明することがない。眞實、內在若しくは不變の價値を所有する物は存することがない。縱令ひ人間の福祉に取つて如何に重要であつても、如何なる性質の所有も價値を授與することを得ない。蓋し、萬物中に在つて、最も必要なる水は價値を有することが極めて稀れであるが故である。あらゆる物は、之れをして人間の願望の對象たらしむる性質の所有に加ふるに、其の存在稀少なるの事情を以つてする場合には價値あるものと一樣に思料せらるゝは、經驗が吾人に示す所である。(ibid., pp. 11-12.)。

價値あるあらゆる物件の受く可き價値の變化に關しては、吾人にして若し暫く何等かの實體が內在的且つ固定的の價値を有して、其の一定の數量をして、總べての事情の下に於いて、恒に同一價値のものたらしむると想像することを得たならば、斯くの如き固定的標準に依つて確められた總べての物件の價値の程度は、其の數量と之れに對する需要との間の割合に從つて變化す可きものであり、又、あらゆる貨物は、言ふ迄もなく、四個の相異れる事情よりして其の價値の變化を受く可きものであらう。(一)そは其の數量の減少よりして其の價値の增加を受く可く、(二)其の數量の擴大よりして其の價値の減少を受く可く、(三)そは需要增加の事情よりして其の價値の擴大を被る可く、(四)其の價値は需要の衰頽に由つて減少せしめらる可きであらう。(ibid., pp. 12-14.)。

然しながら、如何なる貨物と雖も、之れをして他貨物の價値尺度たるに適せしむるが如き固定的且つ內在的の價値を有し得ざることは明瞭なる可きが故に、人間は實際的價値の尺度として、是れ等價値變動の四原因の孰れに由つても影響せらるゝこと最も少なきの觀あるものを選擇するに至るのである。從つて、日常の用語に於いて吾人が或る一定貨物の「價値」を表明するの時、そは八個の相異れる事故に由つて、一時期に於いては、之れが他の時期に於いて存する所のものと相違することある可きである。即ち吾人が其の價値を表明せんと欲する貨物に關する上述四個の事情と、吾人が價値の尺度として採用せる貨物に關する同じき四個の事情とである。斯くて、總べての貨物の價値は、是れ等のものをして人間の願望の對象たらしむる性質の所有と是れ等のものが稀少の一定度位に於いて存するの事情に依賴するが故に、總べての價値の變化は、上述せる四事情の一が發生せるに由つて生じたる其の貨物に對する需要と其の數量の間に存する割合の變化に依賴せざるを得ざるものであつて、又、價値の表現に於ける變化は、吾人が既に言及せる八個の事情の或るものが發生せるに由つて生ぜしめられ得ることゝ爲るのである。而してローダデールは斯くの如き提言の眞なることを種々なる例證に據つて示してゐる。(ibid., pp. 14-22.)。

ローダデールは價値の本質及び其の變動の原因に關して茲に叙述せられたる意見が、決して斬新なるものに非ざることを認める。斯くの如き意見は既に幾多の人々によつて暗示せられ、而して或る者は久しき以前に於いて、可なりの精確さを以つて之れを說明した。(彼れは茲に特にジョン・ローの Money and Trade considered: with a proposal for supplying the Nation with Money, 1705. の一節を引用する)。然しながら、是れ等のものは、或る物が之れをして價値の尺度を形成するに適せしむる眞實且つ固定の價値を有すると做すの觀念を破壞する迄に明瞭

に理解せられたるの觀がないのである。多くの人々は此の仙丹（philosopher's stone）を求めて居つたのである。而して其の知識及び才能に於いて傑出せる人々にして、「勞働」に於いて彼れ等が價値の眞尺度を構成する所のものを發見したと想像せる者は少數ではなかつたのである。茲にローダデールは價値の絶對的標準を求めたるペティ（Treatise of Taxes and Contributions, 1667, p. 23.）、ハヨク（An Essay upon Money and Coins, Pt. I. The Theories of Commerce, Money, and Exchange, 1757, pp. 8-9.）及びアダム・スミス（Wealth of Nations, vol. I, op. cit., p. 38.）の意見を批評する。（Public Wealth, pp. 22-28.）。加之、彼れは勞働が相異れる時期及び相異れる場所に於いて價値を異にするの事實がスミスの『國富論』中の種々なる箇所に於いて、明記若しくは暗示せられたるの事實を指摘して、彼れが勞働を以つて價値の尺度たらしむるの矛盾を立證せんとしてゐる。（ibid., pp. 30-37.）。

即ち著者の見に據れば、勞働は何物と雖も眞實、固定若しくは内在の價値を有することがないと云ふ一般準則に對して何等の例外をも形成するの觀なく、又著者が確立せんことを努めたる二個の一般原理、即ち（一）諸物件は稀少の一定度位に於いて存しつゝの事情と是れ等のものをして人間の願望の對象物件たらしむる其の結合的性質に由つてのみ惟り價値あるものであり、（二）あらゆる貨物の有する價値の程度は之れが數量と之れに對する需要の間の比例に依存することを疑ふ可き何等鞏固なる理由存するの觀なきものである。（ibid., p. 38.）。而して彼れは此の著初版上梓の後凡そ十四年にして刊行せられたる其の再版の廣告に於いて「今や勞働は最早價値の尺度として看做さるゝことなく、却つて何物と雖も、あらゆる時、あらゆる場所に於いて精確なる價値の尺度を形成するの性質を有し得るものなきの事實が承認せられた」と宣言してゐる。（ibid., 2nd ed., 1819, p. viii.）。

四

需要に關して事情が依然として同一であるとしたならば、價値は仍ち稀少と共に增加し、豐富と共に減少す可きである。而も個人の富が稀少に由つて增加せらるゝならば、公の富と私の富との間には對立が存しなければならず、又、是れ等兩者の增加は相異れる原因に依存しなければならぬとローダデールは主張する。

國民的富は是れ迄總べての人によつて、單に其の社會に屬しつゝある個人の富より成るものと考へられ、一社會の資本はあらゆる點に於いて、之れを組成する總べての個人の其れに等しきものであると看做されて來た。（Wealth of Nations, vol. I, p. 406.）。斯くの如き觀念から出發して、經驗に徵して、私產を增加する最も通常の手段たる鄙吝は又、一般に公富の根源であると說かれ、而して節約は公の資本を增加し、贅澤は之れを減少するものと稱せられる。（Wealth of Nations, vol. I, p. 421.）。あらゆる浪費者は公の敵であり、あらゆる節儉家は公の恩人であると說かれる。（ibid., p. 414.）。斯くの如き原則の上にサー・ウイリアム・ペティ、グレゴリィ・キング・アンドリュー・フック（『三田學會雜誌』第三十卷第十一號所載拙稿『古版經濟書解題——一千七百五十年版アンドリュー・フック著國債論』參照）、サー・ウイリアム・パルトニイ（昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』九八六頁參照）、神學博士ビーク（Rev. Henry Beeke—Observations on the Produce of the Income Tax, 1799. の著者）等によつて、國富の種々なる算定が行はれた。（Public Wealth, op. cit., pp. 40-42.）。然しながら、一貨物は人間に取つて有用

若しくは快適なるの事實のみに由つて、直ちに價値を取得するものではない。價値を取得するが爲めには、換言すれば、私富の一部を構成するの資格を授與せらるゝが爲めには、そは稀少性の一定度位に於いて存在するの事情を這般の性質と結合しなければならぬ。而も人類の常識は、人間に取つて概して有用且つ必要なる或る貨物の稀少性を創造するに由つて、一國民の富を增大せんとするの提案を拒否す可きである。例へば、一國が人生に取つて必要且つ便宜なるものを豐富に所有し、而して最も清純なる水流國内に遍きものと假定し、而して斯くの如き國家の富を增加するの手段として、其の豐富が當然其の社會に附隨せる最大なる天惠の一と考へらるゝ水を稀少ならしめんとを提唱せんとする者があつたならば、吾人は斯くの如き人の理解力に就いて如何なる見解を懷抱す可きであるか。然しながら、斯くの如き計畫は、能く是れに由つて個人的富の高を增加するを得可きことが慥かである。蓋し、依然有用にして且つ望ましき性質を保持す可き水に對して、彼れは當然之れに價値を授與せざるを得ざる其の存在稀少なるの事情を加ふ可きが故である。斯くて又、其の國の個人的富は總べての井戸の永代所有權の價値に等しき高に於いて增加す可きである。（ibid., pp. 44-45.）。

著者は又逆の場合をも力强く主張する。暫く、水の存するが如くに或る一定種の食料を著しく豐富ならしむることが可能であると假定し、そが當面の禍害に對する救濟策として如何に快適なるの觀があるとしても、是れに由つて其の國民（再版は society）の富の減少を來すは避け難き所なるが故に、饑饉の急に迫られたる時機に於いてすら、斯くの如き誇稱せられたる豐富を生ぜしむるを警戒す可きことを周到に勸告せんとする者があつたならば、斯くの如き人の忠告は如何に考へらる可きであるか。然も、水若しくは空氣と等しく豐富なるあらゆる物は直ちに價値を有せざるに至らなければならぬが故に、斯くの如き意見は烏滸の觀があるであらう。這般の豐富を來さしむるに由つて、斯くして其の價値が破壞せらる可き食料の種類の總價値に等しき範圍まで、個人的富の總額は最も確實に減少せしめらるゝの結果と爲るのである。尙ほ又、國債、地代及び其の他の所得の資本價値を減少し、斯くて又私富を縮少する。宣戰の布告は地所、其の他國富の如何なるものをも減少することなかる可きである。（ibid., pp. 45-47.）。

斯くて公富と私富との間には完全なる對立が存する。社會は豐富に關心を有し、所有する個人は稀少に關心を有する。ローダデールは、個人の富が或る一定貨物の價値增大に由つて增加せらるゝに從つて、其の國民の富は概して減少せしめられ、又個人の富の集團が或る一定貨物の價値減少によつて減少せしめらるゝに從つて、國民的富裕は概して增加せしめらるゝと做すの結論に到達する。（ibid., p. 50.）。何人と雖も、穀物の豐富が、國民的富の最も重要なる項目であることを疑ふを得ない。之れと等しく、穀物の稀少は、國民的貧困の最も重大なる徵候であることも亦、殆んど疑問の餘地がない。而もグレゴリイ・キングに據れば、收穫の一割、二割、三割、四割、五割の減少は、穀物の價格を普通の相場以上に三割、八割、十六割、二十八割、四十五割方騰貴せしめる。（前揭『重商主義經濟學說研究』一八〇、九八四—五頁參照。Public Wealth, p. 51.）。一般的結合の不可能の外、何物と雖も、私的貪慾の勒取に對して公的富を防護するものはない。和蘭人が夥しき量の香料を燒いたと稱せられるのは這般の原理に基

くのである。(ibid., p. 54.)。

ローダデールは其の論歩を進めて、富（riches）の増加が、貨物の數量に於ける變化より生じつゝある際には、常に富（wealth）の直接減少の證左であり、又、富（riches）の減少は富（wealth）の直接増加の證據であることを概して肯定し得るものと做してゐる。彼れは唯だ這般の命題に對して例外たる後述す可き唯一の場合を認める。斯くて公富の定義を採用することが必要と爲る。而して彼れはボーバン元帥(Maréchal de Vauban) の Projet d'une dixme Royale. 中の意見を傳承して「富」(Wealth) を以つて「人が自己に取つて有用若しくは快適なるが故に、願望する總べてのものより成る」と定義すると共に、個人の富を以つて「人が自己に取つて有用若しくは快適なるが故に、願望するものであつて、一定の稀少の程度に於いて存する總べてのものより成る」と做してゐる。(Public Wealth, pp. 56, 57.)。稀少性が増加する時は前者は減少するが、後者は増加しなければならぬ。

五

ローダデールは價値に對する消費の關係を指摘し、需要の彈力性の可變的度位の結果を細論して、消費の經濟的意義を論述せる先鋒であつた。

私富の本質及び其の蒙り易き變化を十分に了解するが爲めには、需要供給間の相互關係及び一財貨の價値の變化が私富の部分を形成する諸他の貨物の價値に及ぼすあらゆる間接の影響を研究しなければならぬ。あらゆる貨物の價値は(一)其の數量の減少に由り、(二)其の數量の増加に由り、(三)需要の増加に由り、(四)需要の減少に由り變化せしめらるゝを得可きである。(ibid., p. 58.)。是れ等の諸因中の第一のものを取つて言へば、個人の趣味は相違するが故に、人々は一貨物の供給が減少せる際に、彼れが之れを抛棄せんとするの程度に於いて相違す可きである。從つて數量の減少は、常に其の貨物其の者が必要なるの觀ある程度に從つてより有力なる影響を有するが故に、種々なる貨物の價値を種々なる程度に於いて引上げなければならぬ。斯くの如きは種々なる物品の價値に及ぼす凶荒の影響間の相違を明かにする。穀物、肉及び其の他第一の必要品は一定の地位に在つては、又一定の事情の下に於いては、一より五十に價値を騰貴するも、趣味若しくは奢侈の目的物は其の通常の價値の二倍若しくは三倍に騰貴することが殆んどない。(ibid., pp. 59-66.)。次いで、彼れは或る貨物の數量増加が其の貨物の價値に及ぼす影響を論じ、(ibid., pp. 66-72.)、第三に、或る貨物に對する需要の増加が其の貨物の價値に及ぼす影響を述べて、人々が抑ふことの出來る一定の犧牲が生活必要品を取得す可しとしたならば、如何なる價値の騰貴と雖も、彼れ等をして是れ等のものゝ取得を廢棄せしむることを得ずと做し、(ibid., pp. 72-76.)、第四に、或る貨物に對する需要の減少が其の貨物の價値に及ぼす影響を說いて、必要、習慣若しくは趣味に由つて其の貨物に對して生ぜしめられた愛好 (inclination)の程度を注意してゐる。(ibid., pp. 77-79.)。而して後、彼れは需要の種々なる彈力性を示すが爲めに屠肉、葡萄酒及び芥子の例を取つて、砂糖の如き一定貨物の(一)數量減少、(二)需要増加、(三)數量増加及び(四)需要減少に由つて招致せらるゝ投費の順序 (the oder of expenditure) に於ける變更の影響を攻究してゐる。是れ等の諸貨物は甚しく相違せる影響を受く可きである。是れ等の貨物に關する這般の變化は其の各々の數量

及び需要間の割合を變更せしむる上に於いて著しく相異れる影響を有す可きが故に、そは又各々の一定數量の價値を著しく相異れる比率に於いて變ぜなければならぬ。（ibid., pp. 81-107.）。

是に於いて乎、個人的富の集團に於ける增加が其の國民の富の上に同樣の影響を生ずる場合は唯だ一つであつて、而もそは極めて實在し難いものであると云ふ結論が避け難いものと爲るのである。斯くの如き唯一の場合は、即ち或る貨物の數量と之れに對する需要とが比例して增加せられ、而して之れと同時に增加せられた需要の滿足並びに增加せられた數量の取得の爲めに基金が生ぜしめられた際である。（ibid., p. 105.）。

六

ローダデールは次ぎの諸章に於いて、富の泉源及び之れを增大するの手段を論じ、不生產的勞働、分勞及び資本の職能等の點に關して痛烈にアダム・スミスを批評する。彼れに從へば、土地、勞働及び資本は相異れる發達の階段に於いて、甚しく相異れる割合に於いて富の生產に貢獻するも、而も是れ等の三者は總べて富の本源的泉源たるものである。『國富論』の著者は資本の利潤を以つて勞働者によつて原料に附加せらるゝ價値より支拂はれ、斯くて又之れより引き出さるゝものと思料せるの觀がある。（Wealth of Nations, vol. I, op. cit., pp. 400, 426.）。ロックも亦、略々同樣の意見を述べてゐる。（Some Considerations of the Consequence of lowering Interest, and raising the Value of Money, 1692, p. 53.）。若し斯くの如きものが資本利潤の正確なる觀念であるならば、資本利潤は收入の派生的泉源であつて、本源的のものたるを得ざる可く、斯くて又、資本は、其の利潤が單に勞働者の懷ろから資本所有者の懷ろへの移轉に過ぎざるが故に、富の泉源と考へられ得ざることゝ爲る可きであらう。チュルゴオは、資本の所有者は、彼れが其の資本を土地の取得に使用したならば、其の資本が彼れに對して產出す可きものに對して賠償を受くるの權利ありと思惟せるが如くである。（Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses, § 60.）。而もローダデールは這箇後世の所謂「結實說」（Turgots Fruktifikationstheorie）を以つて、實際に於いて利潤の分前に對して準度を供給することすらなきものであつて、又正さにそが如何にして、又何處より發したるかに關して何等の觀念をも與ふることなきものと觀た。（Public Wealth, pp. 155-158.）。斯くして彼れが資本の收受する利潤を以つて上述の如き性質を有する單なる移轉に非ずして、自己の獨立せる勤務より生ずるものと主張し、爰に一種の「間接生產力說」を唱道せることは吾人が他の機會に於いて述べたるが如くである。（前揭『經濟學史』上卷五〇七頁參照）。鋤を有する一個の人は爪を使用しつゝある五十人の仕事を行ふことが出來る。斯くて此の部分の資本は四十九人の勞働の必要を推除する。（ibid., p. 163.）。資本は固定的なると流動的なるとを問はず、國內交易に投ぜらるゝと國際交易に投ぜらるゝとを問はず、決して勞働を發動せしめ、若しくは勞働の生產力を增加するが爲めに使用せらるゝに非ずして、却つて資本が使用せらるゝに非ざれば人間の手によつて遂行せらる可き勞働の一部の必要をそが推除するか、若しくはそが人間の力を以つてしては到底遂行すること能はざる勞働の一部を仕遂ぐるかの孰れかの事情よりして獨自に人類に取つて有用若しくは有利なるものである。而してローダデールは斯くの如きを以つて單なる言葉咎めに非ずして、其れ自體に於いて最も重要なる差別であると觀る。

(ibid., pp. 203-204.)。

ローダデールを以つて觀れば、資本が勞働を發動せしめ、勞働の生産力を增加すると做すの觀念は、勞働が到る處に於いて現存資本の定量に比例せしめられ、(Wealth of Nations, vol. I, op. cit., p. 3.)、一國の一般的勤勉は常に之れを使用する資本に比例せしめらるゝと做すの意見 (ibid., vol. II, p. 37.) を生ぜしめ、斯くて又、資本の增加は富を增大する最高且つ無際限なる手段であると做すの推論を正當ならしめる。然るに、資本が獨自に有用且つ有利に勞働の推除、若しくは執行に使用せらるゝを得ると做すの意見は、自から、一國は需要い存する諸物件の生産及び構成に在つて、勞働を行ひ且つ推除するが爲めに使用せられ得るよりも更らに大なる資本の部分を所有するに由つて利用らるゝことを得ずと做すの推論を示唆する。(Public Wealth, pp. 203-205.)。洵に初めて利潤の本質に關して脈絡ある理論を提唱せるの名譽はローダデールに歸せらる可きものであらう。

七

ローダデールは又、資本形成の原因を以つて節約若しくは貯蓄なりと做すアダム・スミスの學說に對して生産を以つて資本形成の根源と做すの學說を唱道した。

富は惟り其の生産せらるゝ方法に由つてのみ增加せらるゝを得ることが合理的に推論せられ得可きであらう。然るに常に個人的富の總額を公的富と同樣に看做し、而して個人の富を增加するあらゆる手段を以つて公的富を增加するの手段と認むる一般に行はれつゝある偏見は、公的富を增加する最能動的手段として、或る人の資産が彼れに權利を與ふる願望の對象を彼れが彼れ自身より奪ひ取るに依る鄙吝若しくは蓄積(私的資産を增加する通常の手段)を指示したのである。(ibid., p. 208.)。然しながら、ローダデールに取つては、蓄積はA、B及びCよりDに富を移轉するの方法たり得るものではあるが、公の富を增加するの方法たり得ざるものである、蓋し富は惟り其の生産せらるゝと同一の手段によつてのみ增加せらるゝが故である。彼れはアダム・スミスと共に、あらゆる浪費者は公の敵であり、あらゆる節儉家は公の恩人であり、(Wealth of Nations, vol. I, p. 414.)、而して資本を增加するものは鄙吝であつて勤勉ではない (ibid., p. 410.) と主張するものではない。(Public Wealth, pp. 209. 210.)。更らに幼稚なる農業狀態に於いて、或る人が其の使用し得るだけの資本を所有して居つたとしたならば、單に彼れが其の使用し得るよりも以上を取得するが爲めに消費を切詰む可きことは彼れ自身に取つても他の者に取つても孰れも利益でない、而して總べての時代に於いて之れを超えては資本が有利に增加せらるゝを得ざる點が存する。「富の進歩と共に、社會資産の第一項目たる、農民の耕作する土地は改良によつて一層生産的と爲る。改良せられたる耕作法はより多くの資本を必要とする。然しながら、資本の無限の適用によつて利益し得る耕作法は一も存することを得ない。『出來得るだけ多くが、かの畑地に施された』とは總べての社會狀態に於ける農業家の言葉中に存する辭句であり、而して等しくあらゆる社會狀態に於いて、人知の現狀が彼れをして有利に、換言すれば其の産物を增加する幾分の見込を以つて、投下するを得せしめ得るだけ多くの資本が、かの畑地の改良に使用せられたことを意味する」。(ibid., pp. 223-224.)。一國の要する資本の高は全然這般の知識に依存し、斯くて又、あらゆる特殊時期に於いて

嚴密に限定せられる。

ローダデールに從へば、勞働と等しく資本は生産に於ける能動的要素である。洵に勞働が働くと本質的に同一の意味に於いて、資本は働くのである。斯くて彼れは、文明社會に於いては、大洋から取得せらるゝものを除き、人間の富は(一)人的なると資本によつて遂行せらるゝとを問はず、其の願望の對象物の數量を增加し且つ其の品質を改善するが爲めに使用せらるゝ勞働、即ち農業により、(二)人的なると資本によつて遂行せらるゝとを問はず、消費に對して形態を與へ、而して貨物をして消費に適合せしむるが爲めに使用せらるゝ勞働、即ち製造工業によつて惟り增加せらるゝを得るものと主張する。(ibid., p. 278.)。

彼れは勞働の取る方向に及ぼす富の分配の影響を極めて明瞭に表示した。彼れを以つて觀れば、資産の大不平等は下層階級を貧困ならしむるに由つて、到る處に於いて公富の增加に對する主たる障碍であつた。(ibid., p. 345.)。趣味の物品に對する願望に注ぎ込む莫大なる資産を有する人々の投費の道筋は、屢々其の狂想の滿足に寄與する者の奇拔なる想像と等しく際限なきものであるが、而も彼れ等の習慣は彼れ等が斷じて遂行することを要求せらるゝことのない勞働を推除するが爲めの投費を能く示唆することを得ない。之に反して、其の勤勉が彼れをして取得するを得せしむる慰安物を增加する小資産を有する人の習慣は自から彼れの遂行する勞働を推除するの願望を提起せしめ、其の間に彼れは、其の適度の富の中に、彼れ自身を利益し、又彼れの屬する社會を富裕ならしむる所のものを遂行するの手段を發見する。(ibid., p. 248.)。斯くて富の分配は啻だにあらゆる國の産業が從事せしめらるゝ道筋並びに言ふまでもなくそが其の生産に於いて卓越する物品を規制し決定するのみならず、適當なる富の分配は國內市場に於ける規則正しく累進的なる需要を支持するにより、又其の習慣が勞働を推除するの願望を生ぜしむるの傾向ある者に之れを實行するの力を與ふるによつて、更らに一層有效に富の增加を保證する。(ibid., pp. 349-350.)。

フランシス・ベーコン曰く「何事を措いても、一國內に於ける財寶及び貨幣が極めて少數の手中に集められないように賢明なる政策が用ひらる可きである。蓋し、然らざれば、一國は大資本を有するも、尙ほ餓ゆることある可きが故である。而して貨幣は肥料と等しく撒布せらるゝに非ざれば、何等の用をも爲さゞるものである」と。(Bacon's Essays, p. 39.)。ローダデールは此の金言の眞理を强化して、或る程度までスミスの『國富論』中に不足せる考察を供給したのである。スミスに從へば、勞働は能動的生産要素であり、資本は勞働を發動せしむるものであり、而して資本は節約の結果である。是に於いて乎、節約の行はるゝこと愈々多ければ、愈々多くの資本は形成せらる可く、愈々多くの資本が形成せらるゝならば、愈々多くの勞働は發動せしめらる可く、而して愈々多くの勞働が發動せしめらるゝならば、愈々多くの富は生産せらるゝに至る可きである。然るにローダデールの觀る所を以つてすれば、節約は啻だに資本蓄積の唯一主要の泉源でないばかりでなく、殆んど全く、勞働することなき人々によつて、隨つて又、人的勞働を推除し若しくは補足するの方法を發見せんとする何等の誘因をも有せざる人々によつて實施せらるゝが故に危險なる泉源であつて、斯くて又、資本の生産過多を來すの傾向あるものである。

彼れは又、同一の論據に基いて、立法的干涉に由つて强制的に收入の大なる部分を資本に轉換せしむるを非議し、

減債基金の愚を嗤ひ、是れを以つて公富を減少する最能勤的方法なりと做し、産業の依存する需要を刺激するの重要なる所以を强調し、現在蓄積の爲めに捧げられつゝある收入部分を自國産物及び製品の購入に費すを以つて公富を增加する最有效手段と思惟した。彼れは一千八百二十二年、其の『庶民院への請願の大意』中に於いて、國家の資本の大なる部分を收入として年々投費するの方針を採る時は、必然勞働に對する需要を增加し、是れに由つて勞働の賃銀を增大し、人口の增加を奬勵するに反し、法律に據つて强ひて收入の大なる部分を資本として費さしむるの政策を採用する時は、必然勞働に對する需要を減少し、是れに由つて勞働の賃銀を低下し、斯くして無謀に生ぜしめられた過剩人口を餓死せしめなければならぬと力說してゐる、(Sketch of a Petition, op. cit., p. 7.)。

『經濟學の主題に關する一定新原理の叙述』の著者ジョン・レーがローダデール伯と幾多の共通點を有するものであつて、特に(一)國富は私富の蓄積に由つて增加せられ得るものであり、(二)私的及び國民的利益の間には自然的調和が存すると做すスミスの兩推定に對して批評を加へ、而して資本の一般問題に就いて精細なる論述を行へることは、吾人が曩きに本誌上に於いて紹介せるが如くである。(第二十九卷第十二號所載拙稿『古版經濟書解題——ジョン・レーの經濟學の主題に關する一定新原理の叙述』參照)。ローダデールの影響を蒙ること大なりし初期米國經濟學者にレーモンド (Daniel Raymond) があり、獨逸學者にヘルマン (Friedr. Ben. Wilh. Hermann) がある。

八

ローダデール卿の批評は未だ古典的經濟學の發達が完成を見ざる以前に於いて表明せられたものであつて、其の鋒鋩は主としてアダム・スミスに向けられてゐた。『國富論』の出版に次ぐ二世代の間に、道路及び驛馬車の改良は、商工業の指揮者間の交際を容易ならしめたが、而も、是れ等のものは勞作階級に對しては直接に役立つことが比較的少であつた（運河の舟行は低廉であつたが）。同樣に印刷術及び郵便組織に於ける相次げる進歩は、全國の有福階級及び企業階級をして相互に接觸を保たしむるに資する所があつたが、而も是れ等のものは讀むことも書くことも出來ぬ人民の大衆に對しては殆んど何等役立つ所がなかつた。經濟的國民性の精神が博識なる階級から他の階級に浸潤したことは事實であるが、而も其の間に於いて生存資料に對する人口の壓迫は未だ遠隔の地よりする自由にして低廉なる食料の輸入によつて救濟せられずして、階級的不和を生ぜしむるの傾向があつた。斯くて人民は二個の國民、即ち富者と貧者とに分割せられた。主として立法部を操縱せる諸階級による政權の暴虐なる濫用は其の暗影を長く第十九世紀中に展べた。(Marshall, Money Credit and Commerce, op. cit., p. 6.)。

古典的經濟學は、舊家內制度の手工業に代ふるに大規模の機械生産を以つてし、最早過去の保護的立法の必要を感ずることのない企業精神を發達せしめ、經濟組織の變化によつて喚起せられた政治的改革を確保し、而して進步的經營方法に取つて有利なる輿論を敎導す可き學說の體系を要求しつゝある工業ブルヂュワジーの支持を受けて、此の驚嘆す可き激動時代の新「宗敎」の一と爲つた。而して正統派經濟學の伽藍は一千八百十七年に於けるリカードオの『經濟及び課稅原理』の出版と共に殆んど一朝にして竣工した。（前揭『經濟學史』上卷三〇一—三頁參照）。

夙に一千八百二十一年の交に於いて理論の構成は既に完全と看做され、單に必要なるは其の弘布宣傳にありと思惟せられた。（同三九七―八頁參照）。而して其の弘布宣傳は極めて急速に奏效した。一千八百二十一年に在つてはリカードオ經濟學はあらゆる方面に於いて反感を激發せる頗る不評なる小團體、即ち功利主義者の一部の信條に過ぎなかつた。（同三九九―四〇〇頁參照）。然るにそは其の後の十年間に於いて廣く承認せられて、社會的立法に於ける支配力と爲つた。

此の時代の一小冊子の著者によつてリカードオ學派に適用せられた「工業經濟學者」なる名辭は極めて適切なるものであつた。而して工業階級が舊ホイッグ關係の斷片と結合して、近代的自由黨を形成せる時、新經濟學は是れ等兩翼が結合することが出來、而して是れ等のものをして非「哲學的」若しくは前「哲學的」急進主義者及び劣狀主義者の更らに徹底的なる民主主義的教義に基く政策に向つて退却するの必要を免れしめた足場を供給した。經濟學は斯くの如くして實際政策中に取入れられて其の、更らに愼重なる代表者が之れに負はしめたる其の假設的性質を全然失ひ、經濟的原理は直接且つ即時に現存の事情に適用せられ得る準則と看做さるゝに至つたのである。（W. J. Ashley, The Present Position of Political Economy in England――Gustav Schmoller, Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im neunzehnten Jahrhundert, Erster Teil, 1908, XV. S. 4-5.）。

經濟學的方法に關する正統學派の教義は弘布した。リカードオの光彩ある演繹論は觀察を破壞した。一千八百三十年に經濟學の方法論を草したジョン・スチュアート・ミルは、經濟科學を以つて本來抽象科學として、又其の方法を以つて先驗的として特性附けたのである。（John Stuart Mill, On the Definition of Political Economy; and on the Method of Investigation proper to it――Essays on some Unsettled Questions of Political Economy, 1844.）。當面の大問題は猶ほ拘束の撤廢と自由交易の確立とである。演繹法は這般の問題の解決に取つて適當なるものであり、又最も重要なるものである。最も强烈なる產業自由の主張は悉く人間性に關する一定の知れ渡つた事實よりする演繹論である。「演壇に於けるコブデンは、書齋に於けるリカードオと等しく演繹的である」。（Lectures on the Industrial Revolution of the 18th Century in England, Popular Addresses, Notes and Other Fragments by the late Arnold Toynbee, 6th impression, 1902, p. 10）。

一千八百四十六年の穀法撤廢は工業階級の直接の利害によつて指揮せられたのであるが、而も當時の正統經濟學と完全に一致するものであつた。英國の貿易は飛躍的に增加しつゝあつた。英國は世界の工場と化しつゝあるものであつて、又恐らく永く斯くの如き狀態を維持す可きものゝ如くに見えた。純然たる工業的政策が果して結局に於いて危險と爲るの虞れなきや否やに關してマルサスの如き人々すら懷抱せる疑問は侮蔑的に排斥せられた。勞働人口に對する更らに寬大なる態度と初期經濟學者の意に適へるものよりも更らに高尙なる社會觀に引寄せられた者は、ミルがオーギュスト・コント及び社會主義者の影響の下に草した感動的なる章句に於いて彼れ等に訴ふる所多きを看出した。而も斯くの如き章句が正統派の教旨の實體中に於いて何等自然的地位を有せざることは猶ほ未だ悟了せられなかつた。此の間に於いて英國經濟學の滿悅を攪亂するものと期待せらるゝを得可き歐洲大陸の思潮は存

しないではなかつた。然しながら、勞働階級に屬する各個の家族を取扱へるモノグラフを草せんことを期し、而して一家族のモノグラフを草するは單に其の歴史を詳細に說き、其の生活の方法を叙し、而して其の生活の資源を分析するのみならず、複式簿記の一種に於いて其の日々の生活を概括し、經費の各項目を愼重に收入と對比均衡せしむるに在りと做せるル・プレーの方法も、經濟學に對するコントの批評も、ロッシェル、ヒルデブランド及びクニース等獨逸舊歴史學派の人々の見解も猶ほ未だ英國に進入するに至らずして、此の國の經濟學的研究は「島國的偏狹性」を有して居つた。（W. S. Jevons, The Theory of Political Economy, 2nd ed., 1879, p. xlvi; Ashley, op. cit., pp. 8-9.）。

然も一千八百四十六年以後に至つて舊經濟學の使命は一先づ果された。新氣運を齎せるものは勞働問題であつた。經濟學は勞働階級の擡頭に由つて變革せられたと稱するも過言ではない。かの賃銀基金說は、經濟學の科學的研究に對して殆んど何等の興味をも有することなく、單に勞働階級をして永く彼れ等の境涯を持續せしむるが爲めに、其の學說を引用せんとする人々に由つて熱心に固執せられてゐた。而して此の學說が凡そ一千八百二十年の頃から、同七十年に亙つて、普く經濟學者によつて認められて居つたことは、當時の經濟學をして勞働者の間に不評ならしむるに資する所が大であつた。然るに一千八百六十六年、フランシス・デイ・ロングは賃銀基金說が抽象的原理としても尙ほ全然誤れるものであることを痛論し、同六十九年、ウイリアム・トーマス・ソーントンは正常に賃銀率、即ち勞働の價格の決定原因たるの觀あるものは、極めて少數の場合に於いては自由競爭であり、極めて多數の場合に於いては結合であると做し、而して偶々賃銀基金說に觸れて之れを攻擊した。（改造社版『經濟學全集』第四十九卷『經濟學史』所收拙稿『近世英國經濟學史』四四九—四五八頁參照）。一千八百七十四年、ジョン・エリオット・ケアンズは其の Some Leading Principles of Political Economy Newly Expounded. に於いて價値學說に對する勞働者の不競爭集團の存在の意義を明かにし、（ibid., pp. 66-67. 昭和四年版拙著『經濟學史』二七二—三頁參照）、同七十六年、米國經濟學者フランシス・エー・ウオカーは其の The Wages Question. A Treatise on Wages and the Wages Class. に於いて、一般に承認せられたる賃銀說を顚覆して、其の新學說を表明した。（前揭『近世英國經濟學史』四七七—四八二頁參照）。而して所謂科學的社會主義理論の傳播は保守的傾向ある思想家をして是れ等社會主義理論の構成者に對して最も多くの知識的武器を供給せるリカードオ經濟學を再檢討するの必要を感ぜしむるに至つた。

他方に於いて此の國に於ける歴史的研究復活の結果として、又、或る程度まで獨逸歴史學派の影響に由つて、經濟狀態の歴史的研究は著大なる進步を遂げた。然しながら、歴史的方法に據る經濟學の實質的改造は未だ實現せられずして、大學の內外に於ける英國經濟學者の興味の中心は猶ほ抽象的論述に存して居つた。一千八百七十年より同八十年に亙り、舊正統學派の經濟學を包圍して、烈しく之れを攻擊せる種々なる思想系統中に在つて、暫くの間、最も廣大なる影響を有して居つたものはウイリアム・スタンリー・ジェヴォンズによつて代表せらるゝ所のものであつた。

九

洵にジェヴォンズは正統派經濟學に對する勇敢なる叛逆者であり、異端者であつた。彼れは一千八百七十一年を以つて其の『經濟學理論』を公にした。而して其の目的は、彼れ自ら其の著第二版の序文中に述ぶるが如く、如何に「かの有爲なるも、而も執迷の人デーヴィッド・リカードオが誤れる進路に車を引入れた」かを明かにするに存した。而して彼れを以つて觀れば、經濟學は等しく有爲にして且つ執迷なるリカードオの讃美者、ジョン・スチュアート・ミルによつて此の誤れる進路の上に更らに遠く推し進められて混亂に陷れるものである。マルサス及びシィニィオアの如く、遙かによく眞學說を會得せる（リカードオ流の誤謬に累せらるゝことがなくはなかつたが）經濟學者等が存しては居つたが、而も彼れ等はリカードオ・ミル學派の一致と勢力とによつて戰場から驅逐せられたのである。（W. Stanley Jevons, The Theory of Political Economy, 2nd ed., 1879, p. lvii.）。ジェヴォンズの事業は實にリカードオ經濟理論中に潜在する階級的對立關係の不可避性と非妥協性とを免れんとするマルサス及びシィニィオア等の努力を繼續するものとも稱す可きである。（前掲『經濟學史』上卷第六章參照）。而して彼れはミルの經濟理論を批評しながらも、ミルが之れを保存するに貢獻する所大であつたベンサムの功利主義の哲學的理論をミル其の人の到達せる地點を遠く越えて論理的完全の段階に導いたのである。ジェヴォンズは、あらゆる貨物の效用の最終度位が結局減少すると做す大原理は是れまで明確に表明せられたことは殆んどなかつたとは云ひながら、而も幾多の經濟學者の著作中に包意せられて居つたことを認め、茲にシィニィオアの「多樣性の法則」（Law of Variety）並びにバンフィルドの「欲望從屬の法則」（Law of the Subordination of Wants）を掲げてゐるが、而も最も明白に效用法則の本質と意義とを諒知せるの觀あるものとしてリチャード・ジェニングスの著 Natural Elements of Political Economy, 1855. を擧げてゐる。（Jevons, op. cit., pp. 58-62.）。然しながら、ジェニングスが特に他の如何なる經濟學者も曾つて爾く力强く價値の問題に適用することのなかつた其のハートリィ及びヒューム流の意識說の明晰なる表現によつてジェヴォンズに影響を與へたことは疑ひなき所であるが、而もジェヴォンズが主として負ふ所大なりしものはベンサムの An Introduction to the Principles of Morals and Legislation. 及びアレグザンダー・ベーンの註解の便益を與へられて居つたジェームズ・ミルの Analysis of the Phenomena of the Human Mind. であつた。（John Laird, The Idea of Value, 1929, pp. 335-336; O. Fred Boucke, The Development of Economics 1750-1900, pp. 253-254.）

一千八百五十七年、齡二十二にして初めて經濟學に志せる彼れは早く一千八百六十年六月に至る迄に、既に其の主要なる經濟理論を發見した。而して一度び、自己の發見せる所のものが疑問の餘地なき「眞の經濟理論」であることを確信せる彼れは、最早、憤りを感ずることなくして、他の經濟書を讀むことを得ないようになつた。彼れの最も重要なる公理の一は、或る人の消費せざるを得ざる或る一定貨物、例へば平常の食物の數量が增加するに連れて、使用せらるゝ最後の部分より生ぜしめらるゝ效用若しくは利益は、其の程度に於いて減少すると云ふに存する。食事の初めと終りとの間に於ける享樂の減少は之れが例證たらしめられ得るものである。而してジェヴォンズは、均して、效用の割合は貨物の數量の或る連續的なる數學的函數であることを推定する。（一千八百六十年六月一日附、

兄ハーバート宛書翰――『三田學會雜誌』第二十三卷第九號所載拙稿『ウイリアム・スタンリー・ジェヴォンズの書翰に現れたる其の經濟學理論』一一八―九頁參照）。彼れは信仰確き功利主義者であり、這般の理論の障礙たる如何なる強大なる難件をも擧示することなき正統派的信徒であつた。

十

生産と消費との間に於ける均衡の必要は經濟學成立以前の多數の國民經濟論者によつて可成りに明瞭に知られて居つた。ペティは Political Anatomy of Ireland. に於いて、愛蘭の發達を見ざる所以を以つて其の人民の所要品少なきの事實に歸した。（『重商主義經濟學說研究』九六八頁參照）。テムプルは其の Observations upon the United Provinces of the Netherlands. に於いて、這般の關係に於いて和蘭と愛蘭とを對照した。（同六四三―四頁參照）。ノースは其の Discourses upon Trade. に於いて、交易に對する主たる刺戟を以つて人間の物欲なりと觀、之れを抑制するの效果ある奢侈禁止法の如き方策を以つて勤勉の障礙たるものと做した。（同三二七頁參照）。バークリィは其の The Querist. に於いて、「欲望を生ぜしむるは一人民中に勤勉を生ぜしむる最適當の方法には非ざるか。而して我が百姓が牛肉を食し、靴を穿つの慣ひであつたならば、彼れ等は更らに勤勉であつたのではなからうか」、「安樂なる生活は欲望を、又欲望は勤勉を、而して勤勉は富を生ぜしむるものではあるまいか」と問ふた。（ibid., qu. 20, 107.）。而して又、ヒュームは其の Political Discourses. 中の『商業論』に於いて、此の世のあらゆる物は悉く勞働によつて購入せられる、而して吾人の諸欲情は勞働の唯一の原因たるものであると說いた。（『重商主義』一九五頁參照）。

然るに近代の經濟學者は屢々不公平にも消費學說を閑却した。アダム・スミスの大著中には「消費」の題目を有する章節は存することがなかつた。ドロッツ（Joseph Droz）は曰く、スミス學徒の或る者の著書を讀んで、人は產物が人間の爲めに作られずして、人間は產物の爲めに造らるゝと信ずるを得可きであると。吾人が曩きに述べた第十九世紀初頭の反スミス經濟學者ローダデールは實に斯くの如き傾向に對する强烈なる反動を表示するものであつた。（Wilhelm Roscher, Die Grundlagen der Nationalökonomie. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende, 1854, S. 394.）。

而して第十九世紀後期に於ける反正統派經濟學者ジェヴォンズは又、「經濟學は效用の條件に關する十分にして正確なる探究の上に基かしめられなければならず、又這般の要素を理解するが爲めには、吾人は必然人間の欲望及び願望を檢討しなければならぬ」と做して、先づ第一に富の消費の理論を要求した。彼れは此の點に於いて「經濟學は富の消費の考察が生産の其れ、若しくは分配の其れと不可分なる限りに於いて之れと交涉あるものであつて、其れ以上には之れと全然關係がない」と說けるジョン・スチュアート・ミルの意見と相容れざるものである。（Mill, Essays, op. cit., p. 132.）。彼れに從へば、吾人は唯だ一に消費の目的を以つて生産に努力する、而して生産せらるゝ財貨の種類及び高は吾人が消費せんと欲する所のものに關して決定せられなければならぬ。あらゆる製造業者は如何に周到に彼れが其の顧客の趣味と所要とを豫知しなければならぬかを知り、且つ感ずる。彼れの全成敗は之

れに依存する。而して同樣に、「經濟學の理論は正しき消費理論を以つて始らなければならぬ。斯くてジェヴォンズは這般の眞理を明確に知覺せる先輩經濟學者として先づローダデールの名を擧げる。ローダデールは「產業が諸國民中に於いて取る方向の諸因を確むる重大なる着歩は、生產せらるゝ種々なる物品に對する需要の割合を指揮する所のものゝ發見たるが如くである」と明白に述べてゐる。(Public Wealth, 2nd ed., p. 306.)。(Jevons; op. cit., 42-43.)。

ローダデールは、前述の如く、公富と私富とを區別し、而して、稀少性が增加するに連れ、私富は增加するも、公富は減少することを結論した。而してジェヴォンズ其の人は又、此の點を承認せるが如くであるが、而も更らに一歩を進めて、同一の考察が交換價値に對すると等しく使用價値にも亦、適用せらるゝを觀たのである。而して彼れは其の資本及び利子學說に於いて、制欲說と生產力說とを結合せる折衷的理論を表明した。(ibid., ch. vii.)。(昭和四年版『經濟學史』三九六—四一一頁參照)。

十一

ジェヴォンズの學說は固より直ちに學界の一般的承認を受くるには至らなかつた。舊學派は新理論中に何物をも認むることを得なかつた。當時英國經濟學界の最大權威であつたケアンズは其の Some Leading Principles of Political Economy newly expounded, 1874. 中に於いて、當時の新說たるジェヴォンズの效用學說を論駁してゐるが、而も彼れは事實上ジェヴォンズの主張せんとしつゝある點に關して何等の理解をも有せざりしが如くである。(cf., ibid., Pt. I. ch. i. § 4.)。

ジェヴォンズの『理論』出版の翌年、即ち一千八百七十二年、三十歲の若きアルフレッド・マーシャルは The Academy. の四月一日號に於いて此の著を評論して居るが、彼れはジェヴォンズの書中に於いて「絕えず新裝せる舊友に出會ふ」ことを述べ、而して「一定貨物の全部效用は、其の效用の最終度位と比例的でないと云ふことは、有りふれた眞理である」と喝破してゐる。(Memorials of Alfred Marshall, ed. by A. C. Pigou, 1925, pp. 93-99.)。マーシャルの死後、彼れの書類の中から發見せられた此の評論に附せられた年月不明のコンメント中に於いては、彼れは其の後、ジェヴォンズをよりよく評價することを學んだと云つてゐるが、而も當時に於いてさへ、尙ほ彼れの『理論』の中心的主張を以つて、クールノー及びフォン・チューネンの業績よりも低き平面に立つものであると思惟した。(ibid., pp. 99-100.)。傳統的經濟學に對する叛逆者であつたジェヴォンズの筆鋒は當然先輩經濟學者、殊にリカードオに對して辛辣であつた。然るにリカードオは當年のマーシャルに取つては、憧憬の英雄の一人であつた。而して彼れがジェヴォンズの『理論』を一讀した時、リカードオに對するマーシャルの若いローヤルティは沸き溢れたのである。(ibid., p. 100.)。

是れより七年の後、即ち一千八百七十九年に公せる其の夫人（Mary Paley Marshall）との合著 The Economics of Industry. に於いては、其の需要法則の說明に於いて效用遞減の事實に對して重要なる地位を與ふるを辭することなく、「ジェヴォンズ氏の剴切なる成語を用ふれば、フランネルの一ヤードの最後效用は」云々とすら述べ

てゐる。（ibid., p. 69.）。而も彼れは其の後、一千八百九十年七月附、其の大著 Principles of Economics, vol. I. 第一版序文に於いて、彼れをして、凡そ一千八百六十七年の頃、有形界に於けると等しく精神界に於いても、自然に關する吾人の觀察は增加量に關するが如く、爾く多く總量に關するものではないと云ふ事實に大なる重要性を置くに至らしめたものはクールノー及びフォン・チューネンの影響である旨を述べてゐるが、ジェヴォンズの名を擧げてゐない。

ジェボォンズ經濟理論の普及は彼れと同じく限界效用學說に立脚せる墺太利經濟學者の著書の反譯若しくは義解に由つて助勢せられた。斯くてジェボォンズ及び墺太利經濟學者の價値學說の影響はマルクスの餘剩價値學說の侵入を阻止する上に於いて多大なる效果があつた。而して斯學說は又ヒリップ・エッチ・ウィックスチードに於いて其の明快なる解說者を看出した。彼れの一千八百八十八年の著『經濟科學のアルファベット』（The Alphabet of Economic Science. Part I. Elements of the Theory of Value or Worth.）は、宛もジェームズ・ミルの『經濟學根本義』がリカードォの『經濟原理』並びに正統派經濟學に對して有するに等しき地位をジェヴォンズの『經濟學理論』並びに限界效用學派に對して有するものである。

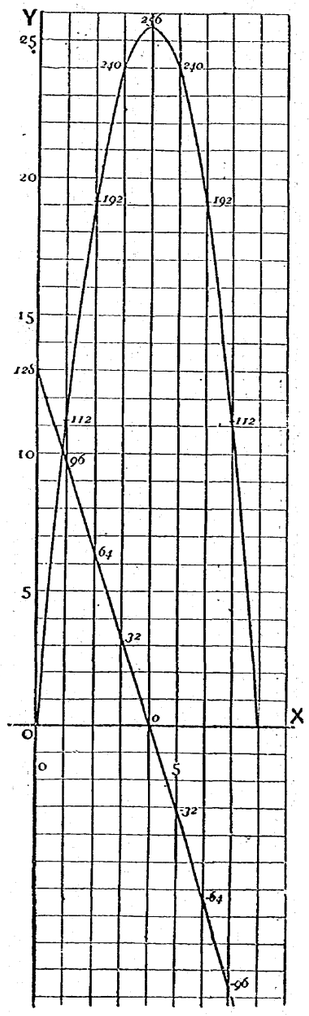
十二

ウィックスチードは本書の緒言中に於いて、ジェヴォンズの「經濟の眞理論」が其の Theory of Political Economy. の再版と共に、最早無視せられ、若しくは愚弄せらるゝこと能はざるに至れる旨を述べ、而して彼れは自己の「價値の理論」（Theory of Value or Worth）に關する著作中に於いて如何なる種類の獨創をも主張するものではなく、ジェヴォンズ、ワルラス、マーシャル及びラウンハルト（Launhardt）の著に通曉せる者は、彼れが曾だに彼れ等の意見を承認せるのみならず、特に感謝することなくして屢々彼れ等の用語を使用し、又彼れ等の說明を採用せることを知る可きであると告白してゐる。然しながら、彼れは、是れ等の人々が、彼れが何物をも器械的に模寫することなく、あらゆる命題を表明するに先立つて之れを自己のものたらしめたることをも亦知る可きであると考へた。（ibid., pp. xii-xiii.）。

此の書の目的は先づ第一に「あらゆる貨物の使用價値及び交換價値は人若しくは社會――是れ等のものに對してそが價値ある――によつて領有せらるゝ貨物の數量の別箇にして然も關聯せる二函數である」と云ふ命題の意義を說明し、其の眞なることを論證し、斯くて又、第二に讀者をして這般の命題よりして必然的に流れ出づる方法及び結果の或るものに精通せしめ、以つて之れと相容れざる論證及び叙述を承認するを彼れに取つて不可能ならしむるに存する。一數量若しくは量定せられ得る事物（y）は、他の量定せられ得る事物（x）に於けるあらゆる變化がyに於ける之れに對應する一定の變化を生じ若しくは決定す可きであるとしたならば、xの函數である。斯くて余が一定品質の織物の一片に對して支拂ふ高は其の長さの函數である、蓋し購入せらるゝ長さに於ける何等かの變化は、余が支拂はざるを得ざる高に於いて、之れに對應する一定の變化を生ず可きが故である。（ibid., p. 1.）。或る個人に對するあらゆる貨物の使用價値、換言すれば、余が一貨物の直接使用若しくは消費より取得する利益の高は

其の數量の函數であつて、這般の數量の變化する際に增減する。(ibid., pp. 6-7.)。可變數、即ち領有せらるゝ貨物の數量と經濟函數、即ち其の使用價値若しくは全部效用又は滿足との間の關係は理論的に曲線によつて表明せらるゝことが出來る。(ibid., p. 15.)。斯くの如き曲線は原則として最高の高さに到達し、而して後、下降す可きであつて、如何なる場合に於いても、そは最高の高さに到達するの傾向を有す可きである。(ibid., pp. 15-17.)。

斯くの如き曲線が引かれたとしたならば、既に領有せらるゝ貨物の數量と其の夫れ以上の增量が其の消費若しくは領有よりして取得せらるゝ全部效用に附加する割合を示しつゝある第二の曲線を之れよりして誘導することが可能であらう。あらゆる點に於ける此の誘導せられたる曲線の高さは同一點に於ける本源的曲線の高さの微分係數たる可きである。今爰に掲ぐる圖を以つて或る經濟函數と其の可變數との間の關係、例へば余の焚く石炭と余が之れよりして取得する利益若しくは滿足の高との間の關係の如きを表明するものと假定し、而して又、x 軸に沿へる一單



位を以つて一ケ月に就き石炭の一噸を意味するものと看做さるゝと假定するならば、吾人は $f(0)=0$、即ち余にして何等の石炭をも焚くとなしとしたならば、余は之れを焚くとよりの何等の便益をも得ることなく、$f(1)=11.2$ 即ち一ケ月に就き一噸の石炭を焚くの全部的效果は一一・二單位の滿足によつて表明せられ、$f(2)=19.2$ 即ち一ケ月二噸の石炭を焚くの全部的效果は、一ケ月一噸を焚くの其れよりも大ではあるが、二倍に相當するほど大ではないと云ふように之れを解するに於いて何等の困難をも有せざる可きである。何等の石炭をも焚くことがないのと、一ケ月一噸を焚くことの間の余が快樂に對する相違は、一噸を焚くと二噸を焚くとの間の相違よりも大である。斯くて又、$f(4)=25.6$ 即ち一ケ月に就き四噸の石炭が余の快樂に對して附加しつゝある全部的滿足は二五・六單位の滿足によつて表示せられ、而して此の點に於いて其の全部的效果は其の最大に於いて存する、蓋し、今、余が余の欲するだけ多くの石炭を有し、而して余が更らに多くを焚くことを餘儀なくせらるゝとしたならば、這箇より大なる數量の全部的效果はより少なる數量の其れよりも少なかる可きである、即ち $f(5)$ は $f(4)$ より少である。最後に、余が、例へば一ケ月八噸を焚くと全然何等の石炭をも焚くことなきとの間に選擇を行ふを餘儀なくせらるゝとしたならば、余は全然此の事柄に於いて無差別なる可き點に到達するであらう。快樂の直接手段としての一ケ月に就き八噸の石炭の全部的效果は其の時に於いては無たる可きである。而して猶ほ更らに多くが余に强いらるゝならば、終に余は石炭を焚いて確然死に到るよりも、寒さの爲めに死ぬるの危險を選擇す可く、而して $f(x)$ は負數量たる可きである。(ibid., p. 39.)。一貨物の全部的效果若しくは使用價値の微分係數は、其の限界的有效性

（effectiveness）若しくは最後效用の度位である。原則として限界的有效性は全部的效果が零である時に其の最大に於いて存し、而して全部的效果が其の最大に於いて存する時に零である。限度內に於いて、各少增加量に對して限界的效果は變化する。（ibid., p. 42.）。實際生活に在つては吾人は全部的效果よりも限界的效果を考慮することが多い。（ibid., pp. 46-48.）。

限界的效果を考慮するに際しては、吾人は絕對に不等質なる大多數の欲求及び滿足を實際上比較し、而して理論上之れを共通の尺度に歸せられ得るものと看做すのである。效用の單位——其れに對して經濟的曲線が引かれ得る所の——は想像し得らるゝものである。ラウンハルト曰く「諸快感は呎に於いて量らるゝことが出來ず、又封度に於いて量らるゝことを得ないが、而も呎・封度に於いて量らるゝことが出來る」と。（ibid., pp. 53-4.）。吾人は斯くの如き曲線上に於いて、相異れる貨物の一定增加量の價値の同不同、二個若しくは其れ以上の目的物の間に於ける勞働の適當なる分配並びに相異れる貨物間に於ける等價の比率に依賴しつゝある諸他の現象を指示するを得ときである。實際に於いて曲線其の者は不斷の變化及び變動の狀態に於いて存す可く、而して這般の變化並びに領有せらるゝ其れ其れの貨物の數量に於ける變化は限界的有效性に於ける變化の可能なる原因の總べてである。前例に立ち戻つて言へば、余の焚く石炭の數量と余が其の消費よりして取得する利益の高とを連結する法則は、冬と夏とに於いて、又、余が現今居住する家屋に於けると余が十年以前に立ち去れる家屋に於けるとでは同一でない。加之、人間の趣味及び欲求は恒に變化しつゝあるものである。彼れの健康の狀態、彼れの愛情の狀態、彼れの研究の性質及び其の他無數の原因は、彼れが一定貨物の一定數量より取得し得る享樂若しくは利益の高を變ずる。（ibid., p. 63.）。二つの物が、而して二つの物のみが、一貨物の限界的有用性を變更することが出來る。即ち第一は其の數量に於ける變化であり、第二は其の數量と其の限界的有用性との間の關係に於ける變化である。概して言へば、函數の本質（即ち曲線の形狀及び位置）に影響する諸原因は、是れ等のものが研究に適する限りに於いては、「消費理論」の下に於いて研究せられなければならず、x の大さ（即ち quantity-index の位置）に影響する諸原因の檢討は、他の事物と共に「生產理論」を包含す可きである。（ibid., pp. 66, 67.）。

十三

ウィックスチードは更らに其の論述を進める。一個の心意若しくは主體中に存する最も多樣多相の欲望及び願望が共通の尺度に歸せしめられ、相互に比較せられ得ることは旣述の如くであるが、而も相異れる心意中に存する欲望若しくは願望は全然同一事物に對するものであつても、如何にしても、相互に對して測定せられ、若しくは共通の尺度に歸せしめらるゝを得ざるものである。洵に二人若しくは其れ以上の個人の欲望及び願望間に何等かの科學的比較を設けることは不可能である。而も經濟的探求の殆んど全界域が集合的欲望及び願望であることは明かである、而して恒に吾人が云々せざるを得ざるものは、此の、又は、彼の個人の側に於ける種々なる物品若しくは貨物に對する需要の相對的强度ではなくして、社會一般の側に於ける其れに就いてであらう。同樣に、吾人は個人に對するに非ずして、社會全體に對する斯く斯くの物品の限界的有用性及び效用を云々するであらう。（ibid., pp. 68-

69.)。或る二貨物U及びXの單位の限界に於ける相對的價値が二人物ABに對して等しくなかつたとしたならば、彼れ等の間に有利なる交換の條件存し、而して其の結果として生ずる變化が、是れ等二貨物の單位の限界に於ける相對的價値が二人の個人に對して同一なる均衡の狀態を生ぜしむるに至る迄、存在し續ける。(ibid., p. 72)。A及びBによつて共に所有せらるゝ物品がA及びBによつて評價せらるゝが如き其の一元的限界效用の比率に於いて相違する場合には、常に有利なる交換の條件が存し、而して斯くの如き交換其の者は之れを生ぜしめたる相違を除去するの傾向を有する。斯くて均衡の狀態に於いては、二つづゝ取られたXYZ等あらゆる物品の一元的限界效用の比率、即ち$x:y$　$x:z$　$y:z$等は其れ其れに總べての所有者に對して同一である。此の均衡の狀態からのあらゆる背離は、同一若しくは別箇の基礎に於いて均衡を回復する交換を惹起するによつて其れ自身を矯正するの傾向がある。(ibid., p. 73.)。

Aの所有する諸貨物の彼れに對する相對的一元的限界效用のスケールに於いて總べての物品の一元的限界效用、即ちu　v　w　x　y　zはZの一元的限界效用、即ちzの名辭に於いて表明せられ、而して同樣にBの相對的スケールはzの名辭に於いてu及びxを表明する。然しながらCはSTVX及びYを所有するも、毫もUW若しくはZを有することがないと假定する。彼れがA及びBと同一の貨物を所有する限りに於いては、彼れの相對的スケールは、均衡の存する時は、彼れ等のものと一致せざるを得ざることが明かである。然しながら、吾人がBの欲望に對する直接の關係によつて這般のスケールを作製せんと企圖する時には、吾人はZの一元的限界效用の名辭に於いて彼れの諸貨物の一元的限界效用を表明すること能はざるを知る、蓋し、彼れは毫もZを有することなく、而して恐らくは何等之れを欲望することなかる可きが故に、吾人は彼れに對する其の限界的有用性を估料することを彼れに求むること能はざるが故である。然しながら、Aのスケールはzの名辭に於けると等しく、相互の名辭に於いてもu　x及びy單位の相對的限界的效用を確定することが明かであり、而して是れ等のものがAに對すると等しくCに對するに非ざれば、AとCとの間に有利なる交換の條件生ず可く、而してv　x　yが兩相對的スケール上に於いて一致する迄繼續す可きである。同樣にBのスケールは相互の名辭に於いてs及びt單位の限界效用を表明する、而してCのスケールは、均衡の存する時には、是れ等兩單位に關してBの其れと一致しなければならぬ。斯くて、縱令ひCは毫もZを有せざるのみならず、何等之れを願望することすらないとしても、A及びBとの取引の便宜上彼れを相互の名辭に於いてs　t　v　x及びyを估料せしむることなく、zを假想的に彼れ自身のスケールに於いて、そがA及びBに對して占むる他の單位に對して相對的に同一地位に置き、其の名辭に於いて是れ等のものを估料せしむるを妨ぐ可き何者も存することがないのである。斯くて彼れは彼れ自身知ることなきも、而も他の人々の心意中に於ける其の相對的强度を彼れが確めることの出來た一願望の名辭に於いて、彼れが有するか若しくは有することを欲する諸貨物に對する其の願望を表明することが出來る。(ibid., pp. 73-74.)。

最後にCにして、明確なる交換條件に於いて隨時BよりしてS及びT、又AよりしてVXYを取得し得ることを知るならば、縱令ひ彼れは彼れ自身Zを欲望することなかる可く、又之れに對する何等可能なる用途を有すること

となかる可しとしても、尙ほ彼れは欣んで之れを取得せんとするであらう。金は即ち此のZたるものである。(ibid., p. 75.)。吾人は金の名辭に於いて總べての具體的效用を量定し、斯くて又是れ等のものを相互に比較するを得るのである。唯だ吾人は斯くの如き手段に依つて吾人が等價の純然たる客觀的及び有形的スケールに到達すること、並びに余が二物品の孰れに對しても一ソヴリンを取得し得るの事實は孰れに對しても一ソヴリンを與へんとしつゝある者が同一人たるに非されば、兩物品が實際に同等の利益を與ふることを立證するものでないことを記憶しなければならぬ。(ibid., p. 76.)。

如何なる交易的社會に於いても、均衡の狀態に於ける際には、交換の集團に參加する總べての貨物の單位の限界效用は其の孰れのものもあらゆる他のものゝ名辭に於いて表明せられ得る一定の相對的のスケール若しくは表の上に自己を排列す可く、而して這般のスケールは一般的たる可きであらう、換言すれば、そは其の社會に於ける各個人に對して、彼れの領有する貨物のあらゆるものゝ一單位の限界に於ける價値を、あらゆる他のものゝ名辭に於いて精密に表明す可きである。或る他の貨物の一單位の限界に於ける被願望性の名辭に於いて表明せらるゝ或る貨物の一單位の限界に於ける被願望性は、第二の貨物の名辭に於いて表明せらるゝ第一のものゝ「交換價値」と同一物である。吾人は斯くて使用價値と交換價値との間に於ける精確なる關係を確證したのである、蓋し吾人は一物品の交換價値は、そが之れを領有する其の社會に於ける總べての人々の相對的スケール上に占むる地位に一致することを發見せるが故である。一貨物の交換價値は其の社會の各員の領有する貨物のストックの彼れに對する全部效用の微分係數である。(ibid., pp. 78-79.)。一貨物の交換價値は單に價値の標準として選擇せられた貨物の限界效用に於いて量定せられた其の限界效用に過ぎざるものである。(ibid., p. 81.)。交換の職能は一の交易的社會の總べての個人の相對的スケールを一致せしむるに存する。(ibid., p. 82.)。而して交換價値は相對的限界的使用價値であり、領有せらるゝ數量の函數である。(ibid., p. 102.)。原則として使用價値が零である時に、交換價値は其の最大に於いて存し、而して使用價値が其の最大に於いて存する時に、交換價値は零である。吾人にして若し無定限に二貨物の吾人に對する供給を增減することを得るならば、吾人は其の夫れ夫れの單位の吾人に對する限界的效果間の比率を無定限に變ずるを得可きである。勞働、貨幣若しくは他の購買力は同一の出費が其の適用せらるゝ交替的限界の孰れに對しても等しき滿足を取得するように分配せらるゝ際に、購買者に對して滿足の最大限を確保する。ロビンソン・クルーソーは產業的均衡が彼れの島に於いて確立せられた時、各箇の勞務に充てられた最後の時間の仕事があらゆる場合に於いて滿足の等しき容積若しくは實體を生ずるように彼れの勞働を分配し、又、同樣に一家の主人若しくは主婦はあらゆる貨物に費さるゝ最後のペニイをして同一の滿足を生ぜしむることを企圖しなければならぬ。(ibid., pp. 124, 125.)。

十四

ウィックスチードは一千九百十年に至つて The Common Sense of Political Economy including a study of the Human Basis of economic law. を公にして、ジェヴォンズ及び墺太利學派の理論の最も興味ある適用を行つた。彼

れが本著中に於いて企圖する所は其の表題の示すが如く、是れ等の學說の常識と其の廣大なる適用性と有用性とを明かにせんとするに在つた。

本書の全般に亙る紹介は之れを後日に期さなければならぬのであるが、吾人は茲に、「經濟力はあらゆる者の努力が限界に於いて他のあらゆる者に對して價するだけを市場に於いて之れに確保するの傾向ある」ことを認めたる彼れが、社會にして彼れの製作する物件を以つて供給せらるゝこと愈々良好ならば、集合的スケールの上に於ける其の位置は愈々低かる可きを以つて、各集團の勞作者は社會が他の總べての物件に於いて富むも、而もそが自ら供給する所のものに於いて乏しきことに利益を感ずること、爲ると說ける一事である。斯くの如きは新たなる語法を以つて表明せられたるローダデールの問題でなければならぬ。是に於いて乎、「余が余の社會的任務に於ける十分なる成功は余の經濟的破滅を意味す可きである」と云ふパラドックスを生ずる。(ibid., p. 352.)。斯くて勞作階級經濟理論に滲通すること著しく大なる「勞働集團」(lump-of-labour) 的なる事物の見方並びに非社會的行爲に對する甚しく見當違いの同情が起るのである。(ibid., pp. 354-355.)。單に「勞働集團」及び「彼れの口より麵麭を取り出す」(taking-bread-out-of-his-mouth) 理論の混亂した自殺的なる本質を論證しただけでは有效ではない。吾人は局部的窮厄が一般的進步に附隨することを了解するの時、吾人は洵に局部的窮厄を免るゝが爲めに一般的進步を抑止せんと試む可きではないが、而も吾人は富の一般的增加——之れに局部的窮厄が附隨せる——の一定部分を其の救濟に轉ぜしめて之れを緩和せんことを試む可きである。成功に對する激勵を薄弱ならしむることなくして、失敗の報いを輕減し、又進步の力其の力を微弱ならしむることなくして、進步に附隨せる禍害に對して有效に保證するは文明が猶ほ未だ解決することのない問題である。(ibid., p. 357.)。

マーシャルが一千九百〇七年三月の The Economic Journal. に揭げた其の論文 Social Possibilities of Economic Chivalry. 中に述ぶるが如く、低廉なる陸海の運輸は第十九世紀末に於いて世界の表面の大なる部分が開拓せられたる事實と結合して、西洋諸國を通じ、殊に又英國に於いて、財貨の名辭に於ける賃銀の購買力を、空前、且つ恐らくは絕後なる可き程度まで上騰せしめたのである。而して此の國の人口の上に作用する土地收益遞減法則の壓迫が暫時停止せられたるの事實は此の世代に對して社會改良に對する特殊の機會を與へ、又之れに對應する責任を此の時代の人々の上に投げたのである。(Memorials of Alfred Marshall, op. cit., p. 326.)。ウィックスチードは斯くの如き時代に其の筆を運び、選擇の大法則の同一性を探求し、吾人が文藝の趣味により以上に耽溺すると社會運動をより以上に支持するとの間に選擇を行ふ原理は吾人が市場に於ける種々なる商品の間に選擇を行ふの其れと同一なるを論證することが出來たのである。